ベトナム中部高原に住む少数民族とゴング

ーコントゥム周辺のバナ族，ジャライ族などを事例としてー

平成 17 年度入学
派遣先国：ベトナム
柳沢　英輔

キーワード：ゴング，青銅打楽器，ベトナム中部高原，ジャライ族，儀礼と音楽

対象とする問題の概要

ベトナム中部高原には 20 の少数民族が住んでいるが，彼らの生活とゴング（銅鑼）は深く結びついている。ゴングには精霊が宿っていると考えられ，村の様々な祭りや葬式をはじめとする宗教的な儀礼の際に必ずゴングを演奏する。またゴングは権力・経済力の象徴でもあり，昔はゴングを多数持っている家は村での地位が高い，発言力があるなどの意味合いもあった。さらにゴングはお金の代わりとして使われてもいた。古く音の良いゴングは非常に大きな価値を持ち，水牛数十頭と交換されることもあった。昔は多くの家で一家に一つはゴングのセットがあったが，ベトナム戦争やその後の政府による定住化政策，市場経済化などに伴い経済的な理由からゴングを手放す家庭が増えていった。現在，ゴングの流出とゴング文化を担っている人々（演奏者、調律者）の高齢化が進み，文化消滅の危機を迎えつつある。

写真 1.　ジャライ族の墓

研究目的

急速な社会変化の中で少数民族は現在ゴングをどのような機会に演奏しているのか，そしてゴング（を演奏すること）は彼らにとってどのような意味があるのかを明らかにすることが研究の目的である。ゴング文化といっても民族ごと(村ごと)に異なる形式をもっている。今回コントゥム周辺に住むモン・クメール語族のバナ族とセダン族，マラヨポリネシア語族のジャライ族を中心に，ゴングの演奏方式，種類などについて民族間（村間）比較をしてみようと思った。また彼らの演奏を撮影し記録に残すことは研究という意味だけでなく、それ自体が消えつつある一つの文化の貴重なドキュメントになると思った。また撮影した映像を後に公開することで，より多くの人が彼らの文化に興味を持ってくれれば，ゴング文化の存続に少しでも貢献できるかもしれないと考えた。

写真 2.　セダン族のロングハウス（集会所）

フィールドワークから得られた知見について

フィールドワークから得られた知見の中で，重要と思われる点を 2 点挙げる。第一に中部高原に住む少数民族は自らゴングを鋳造しておらず，沿岸部に住むキン族（多数派のベトナム人）や国境を接するラオスやカンボジアからゴングを買ってきて，村ごとに異なる音階にチューニング（調律）して使用している点である。近年ゴングをチューニングできる人は非常に少なくなっており，私が知りえた限りコントゥム近郊にはたった 2 人のみであった。

写真 3：ゴングの音程を確かめるバナ族の老人

ゴングは新しく購入した時だけでなく，長年の使用で音程が狂ったり，音が鳴らなくなったりしたとき調律（修理）しなければならない。音階は同じ民族でも地域(村)によって異なるため，ゴングの調律者は地域ごとの音階の違いに習熟している必要がある。また当然ながら微妙な音の違いを聞き分けられる耳が必要である。つまり彼らの知識・技術こそがゴング文化の根幹であり，次世代に引き継がれない限りゴング文化は失われてしまう可能性が高い。第 2 にゴングの演奏は先祖崇拝，精霊信仰といった側面だけでなく，村内の連帯，村同士の交流の機会としても機能している点である。例えば葬式ではその村の年長者（40～60 代中心）と若者（10 代後半～20 代）のグループが交互に演奏することが多いが，他の村からゴングの演奏グループがやってきて演奏に加わることもある。近隣の村から来た数グループが同時に演奏しコンペティション（競技）のようになることも少なくない。演奏するのは男子だけで死者（の棺）の周りを反時計回りに回りながら演奏する。女性は踊り子として男子を取り囲むように同じく反時計回りに踊る。ゴング演奏は村同士の交流の場で，友好関係を確認する場でもあるのだ。また若者にとっては結婚相手を見つける場でもある。ゴングを上手に演奏できることは男子にとって非常に重要で，ゴング演奏の上手なグループ（村）は遠い地域にまで知られている。

写真 4：ジャライ族のゴング演奏

今後の展開・反省点

現地調査ではコントゥム近郊にある少数民族の村でゴングが儀礼や祭りにおいて演奏される場面をハンディカムで録画し，ゴング文化に詳しい村人に話を伺った。できるだけ多くの村で演奏を記録するため，また政治的な理由もあり，一つの村に長期滞在することはしなかった。ゴングを演奏する機会は偶発的な契機で突然生じることが多く，村と連絡を取る方法も無いため，いつどこの村で演奏があるのかという情報を前もって得ることは非常に困難であり，ゴング演奏の撮影は想像以上に難しかった。この次に調査に行く際は少数民族の言語をもっと勉強したいと考えている。今回は少数民族の言語でインタビューできず，ベトナム語や通訳を介した英語でのインタビューとなってしまった。また沖縄の伝統音楽とベトナム中部高原のゴング音楽の旋律，リズムが似通っている点があり，民族のルーツが垣間見られる。今後そうした側面からも研究を行いたいと考えている。